

第三回 呂賞 応募作品

書評タイトル

へ生 へ 滲む歌

短歌を表現することに救いがある

夏野 いづみ

短歌を表現することに救いがある。そう思える歌集がどれほどあるだろうか。博多在住の歌人恒成美代子氏の『而して』は、そんな歌集の一冊である。

妻といふ在り処消え失せ而して博多の端はじに生きねばならぬ

歌集のタイトルに珍しくルビが打たれているが、「而して」とは、漢文訓読文に用いられる「そうして」という意味の接続詞である。

本歌集は、人生の一大事を乗り越えんとして編まれた作者の第九歌集である。巻末に近

い一首からタイトルが選ばれている。「而^{しかう}して」という難い一語に、夫の死を受容し、新たな一步を踏み出そうとしている作者の強い思いが感じられる。「端^{はじ}」という語に作者の慎ましい思いが添えられていて好ましい。妻でありしわたしが記憶に残さねば、記録しなければ生きた証を「ゆうやけその夕やけ／いましばらくは／そめあげてゆく死者の季」中野修「彼方への記憶」の追悼、読んでほしい。あなたはゐない、あなたはゐない。本歌集の最大の特徴は、三章から成る歌集の第三章で、夫が中野修という実名で詠われていることである。歌集中、他に実名で登場するのは、作者に縁のある歌人たちである。中野修氏は詩人である。歌人である作者とは夫婦であると同時に文学における同志であった。一首目、夫の死を悲しんでばかりはいられない。夫の詩業を世に遺したいという作者の

強い意志が「：ば」という接続助詞のリフレインに込められている。二首目、結句の中野修という名に、夫の詩作への敬意が結晶している。三首目、作者は「彼方への記憶―中野修追悼集―」を出版している。それを一番読んでほしい本人の不在が結句のリフレインで切なく響く。最愛の夫に先立たれた深い悲しみが、易しい言葉で読者に差し出されている。穏やかでありますやうにと送り出す。ふ定年の扁ひらたい背中 わたくしの頭に手を載せ笑ってる台北一〇一展望台にて

歌集中、夫との日常生活と非日常の旅がくり返し詠われているが、夫の定年退職の日をろう一首目は、「扁ひらたい背中」と夫の身体的特徴で締めくくられている。台北旅行中の二首目は、自分の頭に手を載せている長身の姿が微笑ましい。歌集を読み進むと、酒を好み、料理が得意で、誠実な夫の人物像が小説を読むかのように明らかにされてゆく。

死んでしまったあなたの足の爪を切る右
足の爪ひだりあしの爪
「出来ないことがあったら電話して頼み
なさい」西部ガスはた九州電力
母さんに今頃会ってゐるかしらかあさ
んお酒を呑ませてください
第三章の哀傷歌三首であるが、ありのまま
の事実が詠われている。特に二首目は、夫が
遺した言葉を上の句に、地場産業である会社
名を下の句に挙げているだけだが、上の句の
言葉の主の不在感が身に沁みる。
一首目は、爪という身体の先端をいつくし
む作者の愛情が、また、三首目は亡き姑への
呼びかけの言葉が、童謡のような響きを伴っ
て、読者の胸に迫る。
若い世代の間に、表現がフラットな短歌が
増えてきているが、作者の作品には結句に力
があり、歌の焦点が絞られている。
詩歌の世界では奇抜な発想や修辞よりも、
ありのままの事実を伝える言葉に力がこもる

ことがある。作者の自画像においても同様だ。

強情で頑固でそのうへ泣き虫でさういふひとがわたくしなのか

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を彷彿させる韻の中で、作者の姿が真実味を帯びて伝わってくる。欠点や弱さを晒し、なお強い自己肯定感が感じられる一首だ。

歌集中の相聞歌、挽歌の対象は夫である中野修であり、歌集中の「われ」は作者であることで一貫している。そうしたブレのない「われ」を通して詩的真実が読者に届けられる。

石は石 息子は息子と思へども ときにくせつなし 音沙汰の無く 帰らんしやい、困ったら電話しんしやい、帰らんしやい、かあさんいつも此処にゐるから かしら。どえいゑんに息子は独り身なのかしら。どうでもよけれど、ただ、云々

歌集中に「朝の陽のさやぐ那珂川かなしかりきみの血を継ぐ子のあらざるも」という一首が詠まれているので、一連の息子は、中野

修氏の息子ではない。人生の諸事情が見え隠れする中、自己開示する作歌姿勢にも信頼がおける。

一首目は、息子と母親のデイスコユニケーションが切なく、また、二首目は、博多弁の母の思いが温かい。三首目は、息子の将来を案ずる母の屈折した思いが表現されており、句読点が実に巧みに用いられている。

春雨に濡れて芽を出すラナンキュラスあわたくしも身ぢからの欲し

パンジーの花のまなこに見つめられもう

言い訳をするのはやめた

「美代子さん、ねえ、笑ひなさい、ほら、笑ひなさい」雨のあぢさゝる艶ます午後を

生きてゆくことはめんだう ゆふがほの

はなの白さが闇に浮き立つ

花を見、その生命力に自分の思いを重ねる

視線により、花が人間めいているのも本歌集の特徴だ。

一首目、春の冷たい雨に芽吹くラナンキュ

ラスに力を得たいと願っている。「ああ」と感嘆詞を用いて、幾重にも重なって咲く美しい花に思いを託す作者の前向きなナルシズムが感じられる。二首目は、パンジーの花にまなざしを感じ、自分の心を投影している。三首目は、紫陽花のつややかな花に亡き姑の異界からの声を聴いている。四首目は、人生には如何ともしがたい出来事があるが、すべて引き受けて生きていこうという作者の諦観が闇の中に咲く夕顔の花の白さに込められている。

三首目、四首目には、人生の艱難辛苦を経た新たな境地が垣間見えている。そうした境地の作品に着目してみた。

あかときの夢より覚めておもふかなへ自由の不幸へ不自由の幸

吹く風に葉裏を見せる真葛原 禍福は糾

えないこともある

夢の覚め際、また、風に裏返る葛の葉を見て、下の句に哲学的な洞察とも思える深い感

概が述べられている。第二章に「馬場あき子、春日真木子の〈生〉滲む歌に触れる秋の夜長を」という一首が詠まれているが、まさに作者の作品も〈生〉滲む歌である。年齢を重ね、体力や気力の衰える中で、様々な人生の苦しみや悲しみに耐え、短歌を作り続けることを通して開ける境地があることを、本歌集の三九四首の歌から教えられた。ネット上でも短歌が発表されるようになり、修辭を競い、内容のおもしろさを競う傾向が強い中、修辭に依りすぎず、あくまでも真実に立脚した作品を生み出している作者の存在が貴重なものに思われる。作者は、短歌を創作することを通して、感性を磨き、自己肯定感を得ている。『而し』は、短歌を表現すること、人生の不条理からの救いがあることを教えてくれる歌集である。

作者は歌を旧かな遣いで表記しているが、調べは口語調である。人生の本質を射抜き、

重厚な内容が詠われているが、言葉や表現はやさしい。

幅広い世代の作者が存在する中で、恒成美代子氏の作品は、若い世代から、年長者まで世代を超えて、短歌創作への希望を与え、読者を短歌に招くあたたかさに満ちている。歌集を手にした時、ルビ付きで読んだタイトルが、歌集を読み終えた時、歌を口ずさむようになじみのある言葉となっている。

歌集 『而^{しかう}して』 (恒成美代子著 / 角川書店)